

令和元年5月14日現在

機関番号：10101

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2018

課題番号：26370471

研究課題名(和文)ゲルマン語文法の試み - 現代ゲルマン諸語全体の形態統語論に関する体系的記述

研究課題名(英文) Toward a comprehensive grammar of the Germanic languages. Systematic description of the morphophonology of modern Germanic cognates

研究代表者

清水 誠 (Shimizu, Makoto)

北海道大学・文学研究院・教授

研究者番号：40162713

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,500,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、申請者のゲルマン語研究の蓄積をもとに、英語やドイツ語といった威信言語から、比較的話者の少ないオランダ語や北欧語、フリジア語やアイスランド語のようなマイナーな言語まで視野に入れて、ゲルマン語全体の文法を体系的に扱った。その際、従来の古語を中心とした歴史言語学的研究に言語類型論的視点を交えて、現代語を中心とした考察を重視した。そして、日本では看過されがちなゲルマン諸語の体系的構造記述を進め、マイナーなゲルマン語の言語擁護および言語政策といった社会言語学的考察を交える形に発展させて、一連の業績を発表した。その成果は単著として刊行することを予定しており、総括作業を進めている。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の学術的意義は、申請者が発表した9編の論文、7冊の著書、3件の研究発表に示されている。扱ったゲルマン語は、アイスランド語とフェーロー語を含む北ゲルマン語、ドイツ語、オランダ語、フリジア語を含む西ゲルマン語、それにゴート語という広範囲に及んでいる。個別言語を論じる際にも、ゲルマン語全般を射程に入れた考察を旨とした。啓蒙的内容を含む教養書も上梓しており、社会的意義も少なくない。また、日本独文学会編集委員会副委員長として語学部門の責任者を務めた際に、同学会の機関誌『ドイツ文学150号』で特集「標準ドイツ語をめぐる諸方言と諸言語」を企画し、本研究に対する学会の注目を広く集めることができた。

研究成果の概要(英文)：In this program, I have tried to take up a series of grammatical features of the Germanic languages, from the prestigious languages (English and German) and lesser used one's (Mainland Scandinavian such as Swedish, Danish, Norwegian bokmaal and nynorsk) down to their minority cognates (Frisian dialects, Icelandic and Faroese). Main main concern has been to get free from the traditional framework which is primarily concerned with purely historical aspects of their ancestors and furthermore to complete a holistic description of the modern Germanic language structure. Thereby I have also taken sociolinguistic aspects such as language policy and maintenance into consideration. I am convinced that I have succeeded in putting forward a new way of analysis which covers the vast field of Germanic linguistics in Japan where such an attempt seems to have been neglected hiterto. An academic monograph which will sum up the results of this five years' research is in preparation.

研究分野：ドイツ語学・ゲルマン語学

キーワード：ゲルマン語 ドイツ語 フリジア語 オランダ語 北欧語 英語 アイスランド語 フェーロー語

1. 研究開始当初の背景

現代ゲルマン諸語の文法構造の全体像は、世界的に見てもこれまでほとんど体系的に記述されることがなかった。ゲルマン諸語の包括的研究は、19世紀に歴史比較言語学が誕生して以来、伝統的に通時的研究がその大半を占めてきた。現代語については、方言も含めてその数が多数にのぼり、各言語が互いに独立した言語規範を備えていることから、統一体を想定する根拠が乏しい。そうした事情もあって、包括的な関連業績は驚くほど貧弱であるのが現状と言える。申請者はこの点を問題視して、本研究に着手することにした。

2. 研究の目的

とくに日本国内では、これまで古語と現代語を体系的に扱ったゲルマン諸語の包括的研究は、皆無であると言っても過言ではない。本研究の目的は、こうした問題意識から、日本のゲルマン語研究の不備を補い、それを国際的水準にまで引き上げることを目指すことにある。その際、申請者のこれまでのゲルマン語研究の蓄積を生かして、現代ゲルマン諸語の包括的文法記述を行い、その成果をまとめた著書に結実させることを目標として研究を進めた。マイナーなゲルマン語および諸方言のデータを重視しつつ、従来、ドイツ語と英語という大言語を中心に行われてきたゲルマン語研究の片寄りを是正し、少数言語のデータをこれと対等に尊重することによって、未知の領域を切り開くことが第一の目的である。

3. 研究の方法

すでに申請者は、第11回日本独文学会賞を受賞した著書『ゲルマン語入門』(三省堂 2012)において、ゲルマン諸語の古語と現代語について歴史的・社会的背景を詳細に解説し、その音韻と正書法を各言語ごとに具体的に論じた。ただし、文法記述については、紙面の制約と出版社の編集方針から、古語だけに限定しなければならなかった。同書の刊行後、申請者はこの不備を常々痛感してきた。現代ゲルマン諸語を中心に据える本研究は、同書の内容を大幅に補うことによって、新たな分野を開拓することを目指すものである。

現代ゲルマン諸語の体系的文法記述には、歴史言語学的共通性のほかに、類型論的特性、言語接触による変容、言語構造以外の外的側面を重視することが必要である。ゲルマン諸語は、国際語としての地位をほぼ確立した英語に始まり、江戸時代から明治初期にかけて近代日本の国家形成と学術的発展に多大な役割を果たしたオランダ語やドイツ語を経て、人口約35万人の小国ながら、中世以来の独創的文献を豊富に有し、千年以上前から本質的に文法構造が変わっていない化石のようなアイスランド語、さらには、ユネスコの危機言語リストに登録されているフリジア語群に至るまで、世界に類例を見ない社会言語学的多様性を呈している。本研究では、古今のゲルマン諸語の形態論および統語論を論じる際に、構造的側面だけでなく、各言語の置かれた社会的状況を考慮に入れることを心がけ、言語使用の実態に即した適切な分析を行うことを念頭に置いて進めた。

4. 研究成果

(1) 平成26年度 (2014年度)

研究1年目の成果としては、以下のとおり、論文3編を発表し、図書3冊を刊行した。

まず、論文9「アイスランド語の言語学用語 (1) 現代アイスランド語文法記述の基礎的作業」を発表した。アイスランド語では、ギリシャ語、ラテン語、フランス語を始めとする歴代の威信言語から外来語を大量に受け入れてきた大多数のゲルマン諸語にたいして、唯一の例外として、

外来語の直輸入を極端に回避し、自らの伝統的語彙をもとに、近代以降、大量の専門用語を編み出して続ける努力が話者によって傾けられてきた。本論文は、「ゲルマン諸語の新造語とその形態論的特徴」というテーマのもとに執筆されたもので、これによって、新造語についてのケーススタディーとして、他の多数のゲルマン諸語と比較した場合のアイスランド語の語彙的特性が端的に理解されることになった。本論文はまた、日本では本格的な成果が挙げられていない現代アイスランド語文法記述の基礎的作業としての意味を持っている。また、論文⁸「ゲルマン語類型論から見たアイスランド語の音韻と正書法」も発表した。これは日本アイスランド学会で前年度に行った公開講演の内容をまとめたものである。さらに、申請者は同年度、日本独文学会編集委員会の副編集長を務めており、同学会の機関誌『ドイツ文学 150号』において、責任者として特集「標準ドイツ語をめぐる諸方言と諸言語」を企画した。論文⁷「未知の言語世界への旅」はその巻頭論文であり、ドイツ語から見たゲルマン諸語の現状について論じ、特集の意義と収録された諸論文の内容を総括したものである。ほかに、図書⁷『オランダ語のしくみ <<新版>>』を刊行した。これは前著『オランダ語のしくみ』の増補版であり、本研究で得られた成果を部分的に取り入れている。また、図書(共著)⁶『日本語大事典』では、「アイスランド語」「ゲルマン諸語」「ドイツ語」「スウェーデン語」「ノルウェー語」の各項目を担当した。さらに、図書(共著)⁵『世界の文字事典』では、「オランダ語」と「ドイツ語」を担当し、両言語の音韻の概要とカナ表記について解説した。

(2) 平成27年度 (2015年度)

研究2年目の成果としては、以下のとおり、論文2編を発表し、図書1冊を刊行し、学会発表1件を行った。

論文⁶「アイスランド語の言語学用語 (2) 現代アイスランド語文法記述の基礎的作業」は、昨年度の研究テーマ「ゲルマン諸語の新造語とその形態論的特徴」による継続的成果である。昨年度の前編と併せて、他の北ゲルマン諸語およびゲルマン諸語一般との比較から、新造語を旨とするアイスランド語の語彙およびその保守的な形態に関する類型論的特徴の一端を明示することができた。次に、論文⁵「朝倉純孝『オランダ語辞典』」は、2014年末に久々に刊行された本格的な蘭日辞典をめぐって、形態、音韻、正書法の面から同書の問題点を論じたものである。周知のように、オランダ語は江戸時代末期から開国と明治維新を経て、近代日本以降には極端にその受容が後退した西洋の近代語であり、日本人が初めて長期間にわたって取り組んだゲルマン語である。本稿は日本独文学会の学会誌『ドイツ文学』への投稿であり、その関係からドイツ語との比較を重視している。アイスランド語の動詞変化との比較にも言及しており、ゲルマン語全体の視点からなされた論考と言える。さらに、図書(共著)⁴『アイスランド・グリーンランド・北極を知るための65章』では、古ノルド語、現代アイスランド語、フェーロー語について、それぞれ「アイスランド語の歩み」「アイスランド語はどんな点でユニークか」「フェーロー語について」の3章を担当し、解説を施した。本書は一般読者を対象とした啓蒙的内容による教養書であり、本研究の社会的意義を示す一例と言える。最後に、学会発表³「北欧の言語と文化と考える」を行った。ここでは、ヨーロッパ諸言語として例外的に中世以来の古風な文法的特徴をとどめるアイスランド語の構造的な特性をめぐって、ドイツ語等のゲルマン諸語との比較から論評した。申請者が数年前から行っている北海道大学での講義内容にも触れており、本研究の教育的意義を示す一例とも言える。

(3) 平成28年度 (2016年度)

研究3年目の成果としては、以下のとおり、図書2冊を刊行し、学会発表1件を行った。

まず、北海道大学文学研究科から出版助成金を受けて刊行した図書（共著）³『情報科学と言語研究』の中で、「アイスランド語研究の歴史と言語規範の形成」の章を担当した。これは上記の学会発表「北欧の言語と文化を考える」の内容を大幅に発展させて、論文としてまとめたものである。アイスランドは北極圏をかすめる絶海の孤島であり、ヨーロッパ大陸からは地理的に隔絶されている。しかし、近年、同国では、情報科学の成果を取り入れる努力が傾けられており、インターネット上でさまざまな文献情報が入手可能になりつつある。本稿は、アイスランドの学術機関が提供するようになった最新のサイトを積極的に利用しつつ、日本から訪れる機会が限られているアイスランドにおける母語擁護の歩みを歴代の文献的にたどりながらまとめ上げた論考である。もう一点の図書としては、² 谷口幸男著『エッダとサガ』（新潮社）の解説がある。同書は日本の代表的なゲルマン語文献学・アイスランド語文学研究者である谷口幸男氏による1976年刊行の名著の復刻版である。刊行後40年を経過したために、復刊にあたっては内容的充実を期する必要があると、高齢で執筆困難な著者から新潮社を通じて申請者が依頼を受けて、改訂補筆を行うことになった。本稿では、原著の内容の一部や誤記等を正し、原著では触れられていなかったアイスランド語擁護の歴史についても詳細に説明を施した。学会発表としては、² 「西フリジア語研究の動向と Fryske Akademy の役割」がある。これは、2016年9月にオランダ・レーヴァルデン市のフリスケ・アカデミー（Fryske Akademy）の新校舎落成の式典と講演会に、同アカデミーから任命された正会員として申請者が招待され、訪問した際の成果として行ったものである。フリスケ・アカデミーはオランダ学士院（KNAW）の直属機関として、西フリジア語およびフリースラント文化の擁護を任務とする代表的な公的機関である。海外旅費を活用することによって、申請者は同アカデミーの所長を始め、当地の研究者たちと積極的に交流し、本研究の遂行にあたって大きな示唆を得ることができた。本発表では、日本ではまったく紹介されてこなかったフリジア語の言語擁護の現状について、現地での体験を踏まえて報告し、学会の関心を高めた。

(4) 平成29年度（2017年度）

研究4年目の成果としては、以下のとおり、論文2編を発表した。

論文4 “Besprek: Hitoshi Kodama, Japansk-Frysk wurdboek (jap. Nihongo-furijiago jiten)” は、フリジア語学文学の代表的な国際学術雑誌 *Us Wurk. Tydskrift foar frisistyk* に掲載されたもので、同雑誌編集委員会から依頼を受けて執筆した招待論文である。同時に、日本人として初めて西フリジア語で執筆した論考である。兒玉仁士編『日本語フリジア語辞典』（大学書林2015）の内容を論じており、日本語と西フリジア語の特徴について対照言語学的観点から考察を施した。また、論文3 「Fryske Akademy とフリジア語の擁護」は、フリスケ・アカデミー訪問の際の成果について報告した上記の学会発表の内容を大幅に充実させて、論文としてまとめたものである。同論文では、フリジア語の公的擁護の現状について、社会言語学的視点からヨーロッパの多言語使用と言語政策との関連で批判的に論じた。加えて、同アカデミーの附属施設「メルカートル・ヨーロッパ多言語使用・言語習得研究センター」(Mercator European Research Centre on Multilingualism and Language Learning) の活動にも言及し、ヨーロッパの少数言語文化擁護の現状についても紹介した。メルカートル・センター（略称）は、1987年に欧州委員会 (European Commission) の主導の下に設立された公的機関であり、その任務は、現代ヨーロッパの多言語社会の実体即ち、地域言語と少数言語の教育について調査、研究、普及を行い、最新の言語教育の指針を提供することにある。その刊行物 *Regional Dossiers* は、ヨーロッパ各地域を対象としたシリーズで、フランス・アルザス、ベルギー、デンマーク、イタリア・南チロ

ル、ロシア・ヤマル＝ネネツ自治共和国での少数言語としてのドイツ語教育の現状を伝えている。本論文では、日本のドイツ語教育では看過されがちな少数言語としてのドイツ語教育という観点を補う意味でも、同シリーズの意義を強調した。

(5) 平成30年度 (2018年度)

最終年度である研究5年目の成果としては、以下のとおり、論文2編を発表し、学会発表1件を行った。このほかに、図書1冊が刊行予定となっている。

論文2「ゲルマン語形容詞の歴史的発達 (1) - ゴート語、ドイツ語、北ゲルマン語」および論文1「ゲルマン語形容詞の歴史的発達 (2) - 西ゲルマン語 (1)」は、古今のゲルマン諸語のデータをもとに、形容詞の強・弱変化の歴史的変遷を文法化、脱文法化、外適応の観点を交えて体系化したものである。現在、残りの西ゲルマン語に関する論考を執筆中であり、全3編で完結させることを目指している。学会発表1「ドイツ語から見た西ゲルマン語形容詞の語形変化 階層表示、平行表示、シンタグマ表示」は、その内容に部分的に基づいている。また、近刊の図書として、1『オランダ語の基本』(三修社)を予定している。同書は本研究の成果のオランダ語への応用であり、日本におけるオランダ語の文法記述としてこれまでに刊行された類書中、最大の規模を誇ることが期待される。現在、編集作業が最終段階に入っており、オランダ人話者による音声資料の録音が完成した後に、三修社から刊行されることが決まっている。加えて、海外旅費を活用して、ベルギー・レーヴェン大学での第20回オランダ語学文学国際会議 (20e Colloquium Neerlandicum) に参加し、併せてオランダ語・ゲルマン語関係の資料収集を行った。同会議では、書籍として世に出た最大のオランダ語文法書 ANS (Algemene Nederlandse spraakkunst) の改訂に関するシンポジウムがとくに有益だった。オランダ学士院 (KNAW) が人文科学部門でこれまでの最高額となる多額の財政援助を投入した結果、現在、オランダ語、西フリジア語、アフリカーンス語の大規模な文法記述が Taalportaal としてインターネットで公開されている (アフリカーンス語については継続中)。英語を記述言語とする同サイトと ANS の対比は、オランダ語と関連言語の記述に新天地を切り開く試みとして、大いに参考になった。ANS の改訂版もまた、当面はインターネットでの公開のみに限定される予定であり、近年のインターネットでの公的援助による学術成果の公開傾向についても、認識を新たにすることができた。

以上のとおり、5年間の研究期間を通じて、多岐にわたる研究成果を挙げることができた。これを単著として著書の形で刊行するべく、現在、総括的な作業を進めている。

5 . 主な発表論文等

[雑誌論文](計 9 件)

- 1 清水 誠, ゲルマン語形容詞変化の歴史的発達 (2) - ゴート語、ドイツ語、北ゲルマン語, 北海道大学文学研究科紀要, 155 号, 査読無. 2019, pp. 1-35
- 2 清水 誠, ゲルマン語形容詞変化の歴史的発達 (1) - ゴート語、ドイツ語、北ゲルマン語, 北海道大学文学研究科紀要, 155 号, 査読無, 2018, pp. 1-54
- 3 清水 誠, Fryske Akademy とフリジア語の擁護, 独語独文学研究年報 (北海道大学ドイツ語学・文学研究会), 第 44 号, 査読有, 2018, pp. 105-126
- 4 Makoto Shimizu, Besprek: Hitoshi Kodama, Japansk-Frysk wurdboek (jap. Nihongo-furijiago jiten), Us Wurk. Tydskrift foar frisytyk, 査読有, Jiergong 66. Jefte 3-4, 2017, pp. 163-168

- 5 清水 誠, 書評:朝倉純孝『オランダ語辞典』,ドイツ文学 (日本独文学会), 査読有, 152号, 2016, pp. 194-200
- 6 清水 誠, アイスランド語の言語学用語 (2) 現代アイスランド語文法記述の基礎的作業, 日本アイスランド学会会報 (日本アイスランド学会), 34, 査読無, 2015, pp. 1-19
- 7 清水 誠, 未知の言語世界への旅 (特集:標準ドイツ語をめぐる諸方言と諸言語), ドイツ文学 (日本独文学会), 150号, 査読有, 2015, pp. 1-11
- 8 清水 誠, ゲルマン語類型論から見たアイスランド語の音韻と正書法, 日本アイスランド学会会報 (日本アイスランド学会), 査読無, 33, 2014, pp. 15-17
- 9 清水 誠, アイスランド語の言語学用語 (1) 現代アイスランド語文法記述の基礎的作業, 日本アイスランド学会会報 (日本アイスランド学会), 査読無, 33, 2014, pp. 1-12

〔学会発表〕(計 3 件)

- 1 清水 誠, ドイツ語から見た西ゲルマン語形容詞の語形変化 階層表示、平行表示、シンタグマ表示, 日本独文学会, 2018
- 2 清水 誠, 西フリジア語研究の動向と Fryske Akademy の役割, 北海道ドイツ文学会, 2016
- 3 清水 誠, 北欧の言語と文化を考える, 北海道ドイツ文学会, 2015

〔図書〕(計 7 件)

- 1 清水 誠, 単著:オランダ語の基本, 三修社, 2019 (刊行予定), 380pp.
- 2 清水 誠, 共著:解説 (谷口幸男, エッダとサガ), 新潮社, 2017, pp. 287-302
- 3 清水 誠, 共著:アイスランド語研究の歴史と言語規範の形成 (加藤重広/佐藤知己 (編), 情報科学と言語研究), 現代図書, 2016, pp. 195-237
- 4 清水 誠, 共著:アイスランド語の歩み/アイスランド語はどんな点でユニークか/フェーロー語について (小澤 実他 (編), アイスランド・グリーンランド・北極を知るための 65 章), 明石書店, 2016, pp. 289-301
- 5 清水 誠, 共著:オランダ語/ドイツ語 (庄司博史 (編), 世界の文字事典), 丸善出版, 2015, pp. 32-35, pp. 60-63
- 6 清水 誠, 共著:アイスランド語/ゲルマン諸語/スウェーデン語/ドイツ語/ノルウェー語 (佐藤義武/前田富祺 (編), 日本語大事典), 朝倉書店, 2014, pp. 3-4, pp. 651-652, p. 1160, pp. 1442-1443, pp. 1619-1620
- 7 清水 誠, 単著:オランダ語のしくみ《新版》, 白水社, 2014, 146pp.

〔産業財産権〕

出願状況 (計 0 件)

取得状況 (計 0 件)

〔その他〕

ホームページ等
なし

6. 研究組織

(1)研究分担者
なし

(2)研究協力者
なし